



# 昔どこかで見たことがあるような。

日本の季節の趣をあらわす時に、人々は月を取り上げてきました。

花と月、雪と月。月は四季折々の表情を持っています。空気が澄む秋は、一段と月が冴えて見えます。

ススキと月の取り合わせは、秋のひっそり感と憂いを一層濃くしています。

ススキを飾り、団子をお供えした月見の会も、今年は新型コロナウイルス感染症の影響で、特別な夏に続き、特別な秋になりそうです。

秋の野に咲くコスモスは、この季節を淡いパステル色で飾り、郊外のスケッチにきた子どもたちに、色とりどりのクレヨンで「私を画用紙に大きく描いてよ!」と言いたそうな顔立ちの優しい花です。

中国語ではコスモスを「可思莫思」の字を当てます。「可」と「莫」の文字は、「思うべし、思うなかれ」と読むことができます。「あきらめたい、あきらめきれない、忘れたい、忘れられない」とコスモスには人それぞれの憂

いや寂しさが隠されています。コスモスの花がいざなう想は人さまごまです。

わが子を災害や事故で亡くした親は、秋の花に悲しみが募るだけかもしれません。それでも残された両親は「帰っておいで」と子供の面影をススキやコスモスの花に追い求めるしかありません。豪雨災害や台風災害など、季節が巡

っても「思うべし、思うなかれ」の哀しい想いが込み上げてくる哀しい現実があります。

秋は祭り。今年はいまだ祭りのにぎわいが遠くなりそうです。

秋を彩る色はやがて、野のコスモスから山の紅葉へと移っていきます。

今見ている眼前の故郷の風景が、昔見たことのある風景と二重写しになることがあります。

秋晴れの日、寄り合って大勢で稲刈りをしていました。刈った稲をはさ掛けしたあと、みんなで煮しめや芋煮汁など手料理を囲んで飲み語らっていたことを思い出しています。

年老いた農家の方がしみじみ語っていました。「昔は、どのムラの稲刈り、田植え、芋の収穫も祭りのにぎわいだったよ。隣の煮しめの味を今でも覚えてるよ」。

一人では生きていけない共同、共助の生活が秋祭りとともにありました。

「中秋の名月、10年に9年は見えず」と江戸時代には言われたそうですが、秋の長雨そして台風も多い季節です。

たとえ雨でも空を見上げ、秋の夜に天上の月に目をやる心のゆとりが欲しいものです。

縁側に供えられた、ススキ、果物、芋、団子、栗など。懐かしく思い出されます。

移りゆく季節。美しく色付く人生を重ねながら、歳月の過ぎ行く早さに驚く「昔どこかで見たことがあるような」神無月の風景です。



指宿市長  
豊留悦男